

## 主 題：救いは信仰のみによる 3

聖書箇所：ローマ人への手紙 3章25－26節

パウロはこれまで私たち人間の罪深さについて教え続けて来ました。私たちがどれほど汚れた存在なのか、私たちがどれほど神の恵みに価しない存在であるかということに彼は繰り返し教えて来ました。そして、それを教えた後、彼はそのような私たちに神はあわれんでくださって、すばらしい救いを備えてくれたということを教え始めたのです。私たちはそのことを特にこの21節から見て来ました。この救いというのはイエス・キリストによるものである、この救いは神の恵みによるのだと彼は教えてくれました。そのことを教えたパウロは再び、私たちに私たちがこのような祝福、すばらしい救いをいただく資格のない者だということを繰り返します。なぜそのようなことをしたのでしょうか？ 私たち信仰者にとって実はそのことはしっかり理解しておかなければならないことだからです。私たちが心から神を称えるためには自分を正しく知ることが必要です。それでパウロは私たちに繰り返して教えて来たのです。私たちがどれほど神の栄光にふさわしくない者か、どれほど私たちが罪に汚れた者かということに繰り返し続けて来ました。ですから、この23節からパウロは私たちに二つのことを教えました。

## ◎私たちの存在とは？

## 1. 神の命令に逆らい続けている者

悲しいことに、私たちは神の命令に逆らい続ける者です。神よりも自分の思い通りに生きたいとする者です。

## 2. 創造の目的に逆らう者

23節に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」とあるように、神の栄光を受けられなくなってしまっているのです。もうすでに私たちが見て来たように、罪を犯すことによって、神の栄光を現わすという私たち本来の目的を果たすことができなくなってしまったと言うのです。神に似た者として造られた私たちが、その栄光にふさわしい生き方をしていないとパウロは教えたのです。彼は私たちに繰り返しました。どこから見ても、私たちは神のあわれみをいただく価値のない者、ただ捨てられてさばかれて当然な罪人であると言うのです。

そのようなことを教えた後でパウロは私たちに言います。私たちはこのような者であるにも拘わらず、神はこのように対応してくださったと。私たちは前回からこの神の対応について見ていますが、すでに三つのことを見ました。

## ☆私たちに對する神の対応

## 1. 神の愛を示された

愛される資格のまったくない者を神は愛してくださったのです。

## 2. 神の犠牲を示された

二つ目に、このような私たちのために尊い犠牲を払ってくださいました。

## 3. 神の救いを備えてくださった

そして、三つ目に私たちのために救いを備えてくださったのです。私たちは価なしに義と認められるのです。無償で、賜物として、贈り物としてこのすばらしい救いをいただくことができるのです。神はその救いを備えてくださったのです。24節で「キリスト・イエスによる贖いのゆえに」とあります。「贖い」とは「罪からの救い」です。この力がこのイエス・キリストのうちにあると私たちに訴えたのです。このイエスだけが救い主だということに彼は高らかに宣言したのです。

そして四つ目、今日私たちが見て行く25節からも彼はこの救いに関して大切なことを教えています。

## 4. なだめの供え物を備えてくださった

25節「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。」今日、私たちが学んで行きたいのはこの「なだめの供え物」ということについてです。パウロはいったい何を言わんとしたのでしょうか？ このことばが意味することはいったい何でしょうか？ 実は、これは私たちが救いを理解する上で非常に大切なことです。パウロはそれを教えようとしているのです。もうすでに見て来たように「救い」は神のみわざです。神が私たち罪人をそのすばらしいあわれみによって救いへと導いてくださること、それはすべて神のわざであると言います。そして、ここでパウロは私たちに救うために神は「なだめの供え物」を備えてくれたと、そのように言うのです。私たちが救われるために、私たちがその罪から救われるために、神は「なだめの供え物」を私たちのために備えてくれたのです。この「なだめの供え物」ということばは「もの」と「場所」の意味があります。ここでは明らかに「もの」です。ヘブル人への手紙9：5では「場所」を指しています。「また、箱

の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べる  
ことができません。」。この二箇所だけに出て来ることばです。今、私たちが見たいのは「場所」ではなくて「**なだめの供え物**」です。「**なだめ**」をもたらすためにささげられたものです。そのことについて、このパウロの教えをいっしょに見て行きましょう。

「**なだめの供え物**」と聞くと、皆さんはいろいろ連想されると思います。そんなに難しいことはありません。国語辞典を見ると「神の怒りをなだめるために、また、鎮めるために供え祭る物」だとあります。これは神学事典を見ても同じような定義がされています。「**なだめ**」とは、正しくは供え物によって怒りが除かれることを意味すると言います。ほとんど同じです。供え物によって怒りを除くということです。私たち日本人も、様々な災いが起こった時にその災いをもたらしたお怒りになった神々をなだめるために、その機嫌を取るためにいけにえをささげることが、いろいろなところで読んだり聞いたり学んだりして来ました。日本の古事記、日本書紀にもそのような話は出て来ます。ある時、海の神が怒りをもたれたときに、日本武尊の奥さんがその海に入水した、それで怒りが鎮まったという話や、いろいろなところにいけにえをもって自然をなだめようとするようなことが記されています。つまり、私たちはこのようなこと、怒りを鎮めるためにいけにえをささげることがよく聞いているのです。ただ、私たちがこのパウロの教えを見るときに、私たちがこれまでに聞いて来たそのようないけにえとは違うことを教えようとしていることが分かります。どこが違うのでしょうか？

私たちが知っている「いけにえ」というのは、怒りをもった神にだれが「いけにえ」をささげますか？人間です。人間がその怒りを鎮めるためにいけにえをささげたのです。ところが、パウロがこの25節で教えることは、神の怒りを鎮めるために、人間ではなくて神ご自身がいけにえをささげられたということです。そこが決定的に違うことです。そのことを私たちはこれから見て行くのですが、その前に私たちがまず復習として知っていることを整理しておきたいと思います。

#### ◎私たちが知っていること

##### 1) 人間はみな例外なく、創造主なる神に対して罪を犯している

神によって造られた私たちが、その方の目的、その方のご計画に添って生きるのではなく、自分勝手に生きている、つまり、歩くべき道から外れてしまっている、的から外れている、正しい道から外れている、すなわち、罪を犯しているということです。例外はありません。人として生まれた一人ひとり、この人類の歴史においてすべての人は神の前に罪を犯していると言います。23節で「**すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、**」と言った通りです。

##### 2) 主なる神はその罪に対して「怒り」を覚えておられる

これはどうしても私たちが覚えておかなければならない大切なことです。神はその罪に対して「怒り」をもっておられるのです。ですから、私たちが学んで来たこのローマ人への手紙の中でそのことが繰り返し教えられています。

**1 : 18** = 「**というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。**」

**2 : 5** = 「**ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。**」

**2 : 8** = 「**党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。**」

**3 : 5** = 「**しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下される神は不正なのでしょうか。**」、神は「**怒りを下される**」と記されています。

**5 : 9** = 「**ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。**」と「**神の怒り**」が記されています。

**9 : 22** = 「**ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。**」

ローマ書にはこのように「神は罪に対して怒りをもっておられる」ということが記されています。もちろん、聖書は私たちにこのことを繰り返し教えています。その中でよく皆さんがご存じのみことばはパウロがエペソの教会に与えた手紙の中に記されています。

**エペソ 2 : 3** = 「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」

**エペソ 5 : 6** = 「**むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。**」

このように見て行くと、コロサイ人への手紙の中にも、テサロニケの中にも、黙示録の中にも繰り返し教えられています（コロサイ 3 : 6、Iテサロニケ 1 : 10、2 : 16、5 : 9、黙示録 6 : 16 - 17、11 : 18、14 : 10、16 : 19、19 : 15）。真理とは何でしょう？皆さん、神は罪をご覧になり、その罪に対して怒りをもっておられるということです。そのことを私たちはもうすでに学ん

で来たし、同時に、私たちはそのことを決して忘れてはならないのです。それが、聖書が教えていることです。ですから、私たち人間は例外なく神に対して罪を犯しており、その罪に対して神は怒っておられるというのです。

### 3) 私たち人間はその神の怒りから逃れることは不可能、何もできない

神の怒りをなだめるために私たちは何もできない者だということです。私たちはどんなに努力しても、神の怒りから逃れることは不可能なのです。つまり、それは神の怒りを買ってしまった私たちすべての罪人は、神の怒りを受ける運命にあるのだということを言っているのです。生まれながらの人間は例外なくみな神のさばきへと向かっているのです。神の怒りを受けるそのような中に生まれ、そのような恐ろしい日に向かって一步一步進んでいるというのです。神の怒りが下る、神のさばきが為されるのです。皆さんが覚えておられるみことば、ヘブル9：27にはこのように記されています。「**そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、**」、一度死ぬことと死んだ後に神によってさばきを受けることが決まっていると言うのです。人は死んで無くなってしまふものではありません、眠ってしまうものではありません。人は死んだ後、必ず神の前でその罪のさばきを受けることになると言うのです。しかし、そのような私たちに神は「**なだめの供え物**」を送ってくださったのです。これは驚くべき真理です。神ご自身がご自身の怒りを鎮めるためにいけにえを送ってくださったというのです。

なぜ、そのようなことを神は為されたのでしょうか？それは私たちにはできないからです。私たちがどんなに努力しても頑張っても、私たちは神の怒りを鎮めることはできません。なぜなら、私たちは罪を犯して来たし、何度も罪を止めようとしても悲しいことに私たちにはできないからです。罪に対して、その罪を怒っておられる神をなだめることは私たちにはできないのです。あなたがどんなに心を入れ替えたとしても、どんなにあなたが努力したとしても、それは不可能なことなのです。だから、神がそれをしてくださったというのです。そして、その「**なだめの供え物**」がいったいだれなのか？パウロはそのことを私たちに明らかに教えてくれます。ローマ3：25を見てください。それはキリスト・イエスであると記されています。キリスト・イエスを信じる人々の罪はこの方によって赦されると言うのです。「**なだめの供え物**」と言った時にパウロは何を言わんとしたのでしょうか？もう少しこのみことばを見ましょう。

#### ◎「**なだめの供え物**」が意味すること

##### (1) 血による

ここに「**神は、キリスト・イエスを、その血による、**」と記されています。この「**血による**」ということばは非常に大切なことを私たちに教えています。ここで言われていることは「死」のことです。「死ぬ」ということです。イエスの死のことを言っているのです。悲しいことに、近年、そのことを否定する教えが出て来ました。この血はイエスの死を意味していないと言うのです。なぜ、そのようなことを人々は教え始めたのでしょうか？ロイド・ジョーンズはこのように説明しています。「神の怒りという教理を避けたいから、神がさばくということを見たいから」と。神の怒りという概念、神が罪を罰するという概念、このようなものはみな無視したいのです。ある人々は、「神とは？」と問われたとき、彼らが覚えたい神、また、彼らが信じたい神は非常に優しい愛に溢れた方だと言います。そして、彼らが信じたくない神は罪をさばかれる神、罪に対して厳しい神、完全な正しさを要求される神です。このような神は彼らにとってありがたくないのです。ですから、このように「**血**」ということばを見たとき彼らが考えることは「これは死のことではない」とするのです。しかし、私たちはどのような人がどのようなこと言おうと、神のおことばが私たちに何を教えているのかということを見なければいけないのです。それが私たちの責任です。イエス・キリストの死によって「**なだめの供え物**」が為されたのです。

いつかの聖書の箇所を見ましょう。というのは、聖書が本当にそのように教えているのかどうかを皆さんに分かっていただきたいからです。そのことを私たちはしっかりと見なければいけません。

**マタイ20：28** = 「**人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。**」、これはイエスがご自分が来られた目的について教えているところです。「**人の子**」、つまり、イエス・キリストのことです。イエスがこの世に来られた目的は「**仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。**」、このみことばを見てどのように思われますか？イエスが教えられたことはいったい何なのでしょう？イエスは明らかに人々の罪を赦すためにご自分のいのちをその代価として、その代償として捨てられたということを教えていると思いませんか？「**自分のいのちを与えるため**」だと言います。ここで言っていることは明らかに、あの十字架における身代わりの死のことです。イエスが十字架で身代わりに死なれたことです。なぜなら、そのためにイエス・キリストは来られたからです。ご自分の罪のためではない、私たちの罪の身代わりとなって私たち罪人に救いをもたらすためにキリストは来られ、十字架でご自分のいのちを捨ててくださったのです。イエスご自身のおことばがそのことを私たちに明確に語ってくれます。

**Iテサロニケ5：10** = 「**主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていて**

も、主とともに生きるためです。」、主が私たちのために死んでくださったのは何のためでしょう？はっきりしていませんか？「主とともに生きるため」、生まれ変わって神とともに生きるためです。そのために主は私たち罪人のために身代わりに死んでくださったと言うのです。

**使徒5：28**＝「**あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか。**」、イエス・キリスト信じた使徒たちは出て行ってイエス・キリストのことを人々に伝えました。大祭司たちはそれに反対をしました。ところが、使徒たちはなおも出て行ってこのキリストを伝え続けたのです。そこで大祭司はペテロたちに向かってこのように言ったのです。「**あの人の血の責任を**」とは何のことでしょう？明らかです。イエス・キリストが十字架で死んだという出来事はその当時みな知っていました。その人々が言うのです、大祭司が言うのです、「あのイエスの十字架の責任を我々に押しつけようとしている」と。

ですから、この「血」ということばを見たとき、これはイエス・キリストの身代わりの死を指しているということは明らかです。どのような新しい教えが入って来ようと、みことばが私たちに教えていることは、今、私たちが見て来たように、明らかに、これはイエス・キリストの十字架の身代わりの死を指しているのです。この主キリストこそ神の怒りから逃れるために備えられた私たちのためのいけにえなのです。

3：25に「**その血による**」と記されているこの「**よる**」という前置詞は非常におもしろい意味をもっています。ギリシャ語の文法では、この「**よる**」という前置詞は「方法、手段、媒体、代価、代償、犠牲」を意味すると言います。そうすると、このみことばが私たちに教えていることは「**イエス・キリストの血によって、イエス・キリストの血というその代価をもって、代償をもって、その犠牲をもって**」ということです。つまり、今、私たちが見て来たように、このイエス・キリストの身代わり死という代価によって、その犠牲によって救いが備えられたのだと、パウロはそう言いたかったのです。それが彼のメッセージだったのです。ですから、このパウロはエペソ人への手紙5：2で「**また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。**」と言っています。イエス・キリストは何を為されたのでしょうか？私たちが愛して、私たちのためにご自身を神へのささげ物、また供え物としておささげになったと言うのです。いけにえのことです、主イエス・キリストが自らを私たちの罪のためのいけにえとしてささげてくださいましたのです。パウロはIコリント5：7でもこのように言っています。「**新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。**」、なぜ、ここに「**過越**」が出て来るのでしょうか？これは新約の教えも旧約の教えも同じ教えであることを示しています。だから、思い出してください。この「**過越の小羊**」と言ったときに私たちが思い出すのはモーセの時代のことです。エジプトの地における話です。神は「これからそれぞれの家庭の初子を殺す」と言われました。「**さばきを下す**」と言われたのです。人間も家畜も同じように初子が殺されるのです。ところが、そのさばきから逃れる方法があると言います。家の門柱とかもいに血が塗られていたら御使いがそれぞれの家を回るときに、血が塗られているその家の初子は過ぎ越される、さばきに会わないということです。パウロは言いました。「もう過越の小羊、キリストはささげられた。」と。この方の死によって、この方を信じる者たちが「**過ぎ越される**」のです。この方を信じる者が、旧約と同じように、神のさばきから逃れることができるのです、救い出されるのです。このことを聞くと、バプテスマのヨハネがイエス・キリストを見たときに言ったことばをよく理解することができるでしょう。ヨハネ1：29「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊。**」、なぜ、ヨハネは唐突にそのようなことを言ったのでしょうか？みことばには一貫性があるのです。旧約においては、いけにえが殺されることによって罪に対する神の怒りがなだめられ、人々は赦しをいただきました。そして、新約ではこの神が送ってくださった「**完全ないけにえ**」によって神の怒りがなだめられ、信じる一人ひとりの罪が赦されるのです。一時的にはありません。動物のいけにえはそうでした。だから、旧約の人々は毎年毎年いけにえをささげなければならなかったのです。けれども、神が備えてくださったこの「**完全ないけにえ**」は完全に永遠に罪から救い出す力があるのです。

神の前にいけにえをささげるときに注意事項があったことは皆さんご存じでしょう。どのような羊を連れて来ても良いのではなかった、どのようないけにえを持って来ても良いのではなかった、そこには条件がありました。そのいけにえは聖いものでなければならなかった、傷のあるものはいけにえではなかったのです。だから、ペテロはこのように言ったのです。Iペテロ1：18-19「**ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、：19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。**」、つまり、私たちが救われたのは銀や金など滅んでしまうようなものによってではなく、「**傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。**」と、完全ないけにえ、神がまったく喜んで受け入れてくださる聖いいけにえです。私たちが

なだめのいけにえになれないのは汚れているからです。神の怒りをなだめるために必要ないけにえは汚れないものでなければならなかったのです。罪のないものでなければならなかったのです。ですから、神が人としてこの世に来てくださり、その方が私たちの身代わりとなってご自分のいのちをささげてくださいました。このような罪のないお方だからその身代わりの死には力があるのです。Iヨハネ2：2を見てください。「この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです。」、神が備えてくださった完全ないけにえ、神の怒りを完全になだめることができる「なだめの供え物」、それがこの主イエス・キリストであると言っています。神を満足させることができる唯一のいけにえ、最初に話したように、このいけにえを私たちは備えることができないから、神が備えてくださったと言うのです。

ですから、今日のテキストのローマ3：25を見てこの主語はだれでしょう？初めに「神は、」とあります。神がこのようなことを為されたのです。私たちがしたのではない、神が一方的にこのようなことをされたのです。これは神の行為です。そのことを表わすのはここに主語が「神は、」と記されているだけではありません。その後「公にお示しになりました。」と記されていますが、この動詞は文法的にも、これは神ご自身がこの行為をなされたということを明らかにしています。ですから、主語だけでなく、この動詞の使い方を見てもパウロが言いたかったことは明らかです。この「なだめの供え物」は神ご自身が備えられたものだということです。このことはヨハネの手紙第一の中でもヨハネが教えています。4：10「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」、皆さんもよくご存じのみことばです。私たち人間が神を愛したのではない、神が私たちのことを愛して下さって、そして、私たちの罪のために神ご自身が「なだめの供え物」を備えてくださった、それはイエス・キリストであると言うのです。これがパウロが記した「なだめの供え物」というみことばが私たちに教えてくれることです。

## (2) 信仰による

今見た25節の前半の部分でもう一つしっかり見ていただきたいことがあります。ここに「…また信仰による」と記されています。パウロが言いたかったこと、それはこの神の罪の赦し、この救いというものを私たちはどのようにして手に入れることができるのかということです。そのことをここで教えているのです。パウロが言ったことは「それは行ないではなく信仰による」というのです。彼が一貫して私たちに教えてくれることは、「救い」は私たちの努力で得るのではない、私たちの行ないによって神が与えてくれるものでもない、この救いは「神からの一方的な恵みによる」ということです。私たちがイエス・キリストを心から受け入れるときに、その信仰によって私たちはこの救いを得ると、そのように言っているのです。ですから、そのことをパウロはここでも記しているのです。「なだめの供え物を」をあなたのもとするために神が備えてくれた救いを、あなた自身のもとするために必要なのは「信仰だけ」だと教えるのです。それが、この「なだめの供え物」に関して彼が教えたことですが、このことに関して彼はこのような説明を加えます。

その後「それは、ご自身の義を現わすためです。」とあります。これは「なだめの供え物」、いけにえを備えた目的を教えるのです。25節「…というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。」、26節「それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」、パウロはここでこのイエス・キリストの死というものが実はあることを証明すると言うのです。イエス・キリストの身代わりの死は、実は、私たちに神についての大切なことを教えるのです。それは「神は義なるお方である」ということです。そのことが記されているのです。25節と26節に「ご自身の義を現わすため」と繰り返して書かれています。実は、イエス・キリストの十字架を見ると私たちはそこに神の義を見ると、それがパウロが言いたかったことなのです。この「現わす」ということばは「明らかにする」ということです。明らかに示すということなのです。イエス・キリストの十字架は「神の義」を人々の前に明らかに示したのです。「神の義」、すなわち、神は聖い方であり神は正しい方であることを人々の前に明らかにされたと言っているのです。なぜ、そのようなことをパウロが言ったのでしょうか？パウロはその説明を25節でしています。「というのは、今までに犯されてきた罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。」と。

ある人々は、例えば旧約聖書のみことばを見てこのように思うのです。「あるときは神は罪に対して非常に厳しいさばきを下された」と。そのようなことも確かにあります。しかし、あるときはそのように罪を犯している人々に対して神は沈黙しておられる、そのように思える箇所があります。今の私たちの社会を見てもそうでしょう。「神さま、なぜ、このような悪に対して何もされないのですか？」と思うときがあります。どうしてこのような悪を放っておかれるのだろうか？と思うことがあります。パウロはそのことをよく知っていたのです。そこでパウロはその疑問に対してこのように答えたのです。「実は、それは神の忍耐だ」と。ここに「見のがして来られた」とあります。「見過ごして来た」と言うのです。このことばは「使徒の働き」14章でパウロによってこのように使われています。14：16「過ぎ去った時

代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。」、神ある程度人間の好きにさせておられたのです。罪人が罪の中を歩み続けて行くことを神は「見のがして来られた」のです。また、パウロがアテネに行ったときのことを思い出してください。町は偶像でいっぱいでした。そこでパウロは神について話をするのですが、使徒17：30「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」、この二箇所のみことばが私たちに教えていることは何でしょう？神は確かに罪が横行していることを見ておられました。それに対して神は怒りをもっていなかったと言っているのではありません。もっておられました。でも、神は忍耐をもって、その人々が悔い改めて神に立ち返ることを待っておられると言うのです。というのは、この「見逃して来た」ということばは「赦す」という意味ではないからです。神が罪を「見のがして来た」というのは、神が罪を赦して、もうさばきを下さないというそのようなことではないのです。神は罪のさばきを警告しておられます。すでに私たちが見て来た通りです。では、なぜ神はさばきを下されないのでしょうか？今、見たように、神は忍耐をもって罪人が神に立ち返るように、その機会を与え続けておられるからです。今の私たちを見てもそうです。イエスを信じている皆さん、神はいったい何年間忍耐をもってあなたのことを待っておられたことでしょうか？イエスを信じるまでの私たちは神に逆らい続けて来ましたが、神はみことばが教える通り、忍耐をもって私たちの悔い改めを待っておられたのです。そして今、このような救いに与ったことを心から感謝するのです。ですから、私たちがこのみことばから示され教えられる神は、罪に対して怒りをもっておられる神、そして同時に、その罪を赦してくださる愛に満ちあふれたお方なのです。

パウロは言います。「ご自身の義を現わすため」と。「ご自身が正しい方であることを現わすため」、「ご自身が聖い方であることを現わすため」だと。だから、私たちが見なければいけないことは、イエス・キリストが十字架にかかったときに、神はご自身の怒りをご自分のひとり子であるイエス・キリストの上に注がれたということです。イエス・キリストが十字架にかかったとき、そこで私たちの罪がさばかれたのです。父なる神はキリストの上に私たちが受けるべきさばきを下されたのです。皆さん、私たちが忘れてはならないことは、イエス・キリストのあの十字架というのは、必ず罪に対するさばきがあるという約束であり警告なのです。イエス・キリストの十字架を見るとき、私たちは私たちの神が罪を完全に憎んでいる聖い正しい方だということをしっかり覚えなければいけないのです。そのことを明らかにするために神はイエス・キリストを十字架に掛け、そして、私たちの身代わりに彼をさばかれたのです。それが私たちの神なのです。

皆さん、私たちのこの神は聖い正しい方ですから、罪をもってこの方の前に立つことはできません。神によって造られたすべての被造物が、恐れをもって仰ぎ見るお方です。罪のない天使たちでさえも、恐れを抱いてこの方の前に立ちます。それほど神は聖い方です、正しい方です。罪を放っておかれないう方です。必ずさばかれる方です。しかし同時に、この方は慈愛に富んだ方です。私たちの罪を赦すために神ご自身が「なだめの供え物」を送ってくださったのです。あなたの罪を赦してくださるのです。

私たちは、この聖さ正しさとこの愛とがどうして共存できるのかと思うかもしれません。でも、それが神なのです。私たちが忘れてはならないことは、私たちの神はこのような神だということです。聖い正しい方であり、罪を憎んでおられる方であり、さばきを警告しておられる方であり、同時に、ご自身の愛するひとり子イエス・キリストの犠牲によって、信じる一人ひとりに救いを与えてくださるあわれみに満ちあふれたお方なのです。私たちににとっての驚きは、罪の清算を罪人に要求された神が、それをご自身で支払われたというこの驚くべき真理です。神ご自身がこのような犠牲をもって私たちの罪の清算をしてくださったのです。クリスチャンである皆さん、すばらしい神ではありませんか！この神によって贖われたことは何という感謝でしょう！このような神が私たちの神です。私たちの神は大いに誇ることでできる神なのです。誇りながら、私たちはこの方のすばらしさを証することです。

同時に、まだ、イエスを信じておられない方、いつまで神に逆らい続けて行くのですか？神は警告を發しました。同時に、神は救いの御手を差し伸べてくださいました。なぜ、救いを拒み続けるのかです。神が望んでおられるように、罪を悔い改めてこの神に立ち返ることです。この救いをいただくために、神のもとに戻って来ることです。そして、今日、神と和解すること、それが主があなたに望んでおられることだと思いませんか？それなら、今、それをするのです。主に救いを求めて出て来ることです。そして、今日、救いをあなたのものとするのです。